

国立病院機構熊本医療センター

No.225



くまびょう NEWS

NHO KUMAMOTO MEDICAL CENTER KUMABYO NEWS

発行所
国立病院機構熊本医療センター
〒860-0008
熊本市中央区二の丸1番5号
TEL (096) 353-6501(代)
FAX (096) 325-2519

国立病院機構熊本医療センター医学会 が開催されました



1月16日に国立病院機構熊本医療センター医学会が開催され、36題の演題が発表されました。診療科からは非常に稀な症例の報告や新しい治療法などが発表されました。看護部・看護学校、メディカルスタッフ、事務部からは新しい取り組みや教育・コミュニケーションの研究が明快に分かり易く発表されました。院外からは、おびやま在宅クリニックの田代清美看護師から在宅医療の紹介がありました。発表内容は全体的に毎

年レベルアップし、全国学会での発表や論文執筆などが可能と思われるものばかりでした。最後に、座長を務めて頂いた職員、小野・出来田内科医院小野俊一院長、宮本外科消化器内科宮本大典院長、および、運営に協力していただいた管理課、研修センター、副師長、研修医の皆さんに感謝申し上げます。

(副院長 片渕 茂)



小野・出来田内科医院 小野俊一院長
と井樋教育研修係長



宮本外科消化器内科 宮本大典院長
と池田7北病棟看護師長



おびやま在宅クリニック 田代清美
看護師の発表の様子

基本理念

最新の知識・医療技術と礼節をもって、
良質で安全な医療を目指します。

運営方針

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. 良質で安全な医療の提供 | 4. 教育・研修・臨床研究の推進 |
| 2. 政策医療の推進 | 5. 国際医療協力の推進 |
| 3. 医療連携と救急医療の推進 | 6. 健全経営 |

患者様の権利

1. 良質かつ適切な医療を公平にうける権利があります
2. ご自身の医療について理解しやすい言葉と方法で十分な説明と情報を受ける権利があります
3. 病院から説明と情報を得た上で、自らの意志で治療を受け、あるいは選択し、拒否する権利があります
4. 自分の診療記録の開示を求める権利があります
5. セカンド・オピニオンを求める権利があります
6. 個人としての人格の尊重とプライバシーの保護を受ける権利があります

VOICE

登録医の声

わかばクリニック 院長 片山 貴文



健軍の若葉でわかばクリニックを開業している片山と申します。

開業前は、医療センターにて消化器科に所属し、4年間ほどお世話になりました。当院は開業6年目に入り、消化器を中心とした一般外来部門、超高濃度ビタミンC点滴や腸内洗浄を行う自由診療部門、在宅診療を行う訪問診療部門の3部門からなります。また、付属する事業所として、居宅介護支援事業所わかば、訪問看護ステーションわかばを併設してお

ります。クリニックの位置する若葉地域は、熊本市内の中でも高齢化率が最も高い地域で、それに伴い、訪問診療が必要な患者さんは多く、当院は現在100人程の在宅患者さんを担当しており、その数は年々増加しております。在宅で診ている患者さんの多くは、状態が悪くてもなかなか入院を承諾されず、できる限り自宅で対応出来るように頑張っておりますが、訪問診療中に、突然入院が必要な場面に出くわします。そんな時、訪問先から電話で医療センターに入院依頼をする事がありますが、いつも、快く入院を受け入れていただき、大変感謝しております。断らない病院を今でも貫いていただいているおかげで、患者さんはもちろんの事、私共も、安心して診療を行う事ができます。

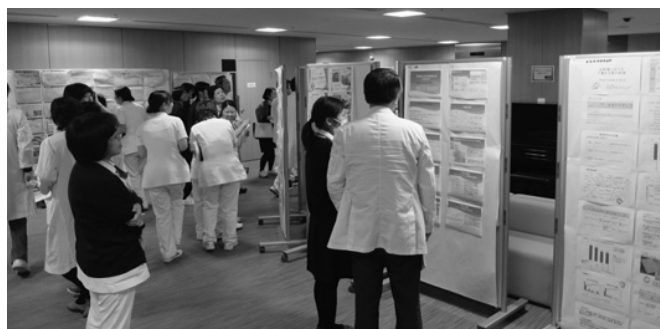
クリニック以外の活動としましては、開院当初より、2ヶ月おきに地域の住民の皆様に対して、健康談話会を行っており、予防医学や、病気の知識を広める普及活動や、健軍商店街の活性化活動を行っております。また、医師会看護学校の講師や、医師会の広報委員会の委員をしており、また、国際交流委員会では、高橋先生や武本先生とご一緒させていただいております。何かと忙しい毎日を送らせていただいておりますが、訪問診療の患者さんの増加に伴い、私一人では対応出来ない状況となっており、現在、医師募集しておりますが、なかなか見つからず、地域医療に対する情熱だけで、なんとか毎日を乗り切っております。何かと無理なお願いをする事もあるかもしれませんが、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

「第2回QC活動発表会」が開催されました

平成27年度のQC活動発表会は計27題と多数の発表があったため、平成28年2月4日と2月9日の2日間に分けて、研修センターホールで行われ、総計280名の参加者があり、大変盛会でした。組織横断で取り組んだ「QC活動」が3題、部門内で取り組んだ「QCサークル活動」が24題発表されました。医療サービス8題、医療安全5題、経営改善6題、その他8題の発表があり、各グループともレベルの高い発表であり、次年度のQC活動の教科書となるような発表も多数ありました。一つ一つのQC的手法は、大多数のグループが使いこなしていましたが、効率的なQC活動の要点であ



QC活動発表会会場の様子



参加者全員で評価しました。

る「特性要因図で真の要因（原因）を絞り込み、系統図とマトリックス図による対策の評価・決定に結びつける」所が不十分なため、大変、時間と労力を要した改善活動もありました。参加者全員による「紅白歌合戦」方式による評価は大変好評であり、病院代表評価者の評価と合わせて優秀賞が決定されます。今回の発表は、QC活動全国大会に負けないレベルであり、10月の「医療のTQM推進協議会全国大会」（倉敷市）や11月の「国立病院総合医学会」（沖縄）で発表する予定になっています。発表会に参加し盛り上げてくれた皆様に厚くお礼申し上げます。（副院長 片瀨 茂）

職場紹介

臨床検査科



臨床検査科は高木一孝部長、武本重毅科長のもと、総勢33名のスタッフで業務を行っています。3階に検体検査室、病理検査室、4階に生理検査室、採血室が有ります。検体検査は、一般、生化学・免疫、血液、細菌、輸血に別れ、毎日500名程度の検査依頼があります。病理検査室は病理診断、細胞診、術中迅速検査、剖検を行います。生理検査は心電図、肺機能、脳波、超音波検査等を行います。採血室は看護部のご協力のもと、受付、採血管準備、検体確認・搬送を行います。「研鑽・貢献、継続は力なり、整理整頓、思いやり」を理念に掲げ診療支援に役立つよう日々心掛けています。これからもご指導、ご協力宜しくお願い致します。

(副検査技師長 井筒屋 聡)

Staff 紹介

4月より鹿児島から転勤で来ました井筒屋といいます。いわゆるリターンライダーで数年前にバイクの大型免許を取得しました。熊本は、阿蘇や天草が近くにあり週末にツーリングを楽しんでいます。バイク好きな方、一緒に温泉巡りツーリングなどいかがでしょうか？

【副検査技師長 井筒屋 聡】



検査科レクリエーション活動♪

検査科では、たまの休日に有志で遊んでいます。バーベキューやお花見など……（あ。飲み会ばかり…）バトミントンもやりました。スポーツ人材の少ない部署ですが、飲み会だけでなく、体を動かすコミュニケーションを増やしたいものですね。

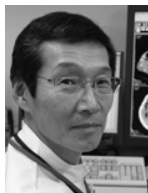


4月より病理検査室に配置換えになりました鹿島といいます。運動が好きで、地元でバスケットをしています。熊本でも試合したいのでバスケット好きな方、ぜひ声をかけてください！

【臨床検査技師 鹿島 星林】



2016 診療科紹介(91) 放射線科 (画像診断センター)



部長
吉松 俊治 (よしまつ しゅんじ)
画像診断一般、血管造影
インターベンショナルラジオロジー
日本医学放射線学会放射線診断専門医
日本医学放射線学会研修指導者
熊本大学医学部臨床教授



医長
浅尾 千秋 (あさお ちあき)
画像診断一般
日本医学放射線学会放射線診断専門医
日本医学放射線学会研修指導者
検診マンモグラフィー読影認定医

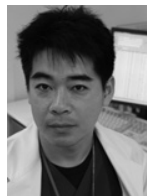


医長
伊藤 加奈子 (いとう かなこ)
画像診断一般
日本医学放射線学会放射線診断専門医
日本医学放射線学会研修指導者
検診マンモグラフィー読影認定医

診療の内容と特色

当センターは、放射線診断専門医（5名）、放射線専門医（1名）、診療放射線技師（23名）、看護師（6名）及びクラーク（2名）で運営しています。平成18年10月より電子カルテシステムが稼働し、平成19年2月より完全フィルムレス化となりました。平成24年10月の新電子カルテシステム更新時に、心カテ等の動画保存と自科検査等の院内画像全体の電子保存を行い、レポートや同意書等の紙文書をすべてe-文書化しました。救急外来を含む全てのCT・MRI・核医学検査における画像診断報告書を翌診療日までに作成し、画像診断管理加算2を取得しています。平成26年1月より3TのMRI装置（フィリップス社製Ingenia）が稼働し始めました。平成27年4月にガンマカメラと透視撮影装置が更新されました。

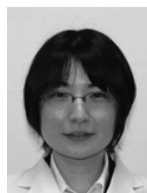
画像診断機器は、X線撮影装置（CR装置2台・FPD装置4台）、透視撮影装置（2台）、乳房撮影装置（1台）、全顎撮影装置（1台）、CT装置2台（128スライスCT・64スライスCT）、MRI装置2台（3T装置・1.5T装置）、FPD搭載血管撮影装置（心臓用1台・大視野用1台）およびSPECT対応型ガンマカメラ（1



医長
根岸 孝典 (ねぎし たかのり)
画像診断一般、血管造影
インターベンショナルラジオロジー
日本医学放射線学会放射線診断専門医
日本医学放射線学会研修指導者



医師
岩下 孝弥 (いわした こうや)
画像診断一般、血管造影
インターベンショナルラジオロジー
日本医学放射線学会放射線診断専門医



医師
猪山 あゆみ (いよま あゆみ)
画像診断一般、放射線治療

台)などがあります。院内はデジタル画像を全てフィルムレス運用し、高精細モニターにて診断しています。

診療実績

平成26年度年間検査症例数はCT26,605名、MRI6,976名、核医学検査696名、血管造影894名です。平成21年9月23日の新病院開院時よりマルチスライスCT2台（シーメンス社製Definition AS+とSensation 64）が稼働しています。128スライスCTを用いて、冠動脈CTだけでなく、Adaptive 4D Spiral撮影法を用いた4次元CTによる血流動態評価が可能となりました。また、128スライスCTと64スライスCTの2台をフル稼働することで、1日100名以上のCT検査の大半を緊急対応しています。平成22年4月より外傷全身CT加算の施設基準が取得可能となりました。平成26年度の外傷全身CTは593名、冠動脈CTは164名でした。

今後の展望

トモシンセシス撮影が可能な新しい乳房撮影装置（富士フィルム社製AMULET Innovality）が導入され、平成28年4月より稼働となります。

ご案内

外来検査予約は放射線科受付096(353)6501(代)(内線3201)に電話で予約した後、専用の画像検査予約ファックス送信票（診療情報提供書兼紹介状）を紹介予約センターへFAX（096-353-6563）お願い致します。画像検査予約ファックス送信票および検査予約の手順と注意事項を病院ホームページの「紹介予約センター」の「CT、MRIなどの検査予約について」に掲載していますのでご利用下さい。冠動脈CTは脈拍低下の前投薬投与をしますので、循環器外来受診の予約をお願い致します。

熊病の歴史

血液内科 第2話 (全4話連載)

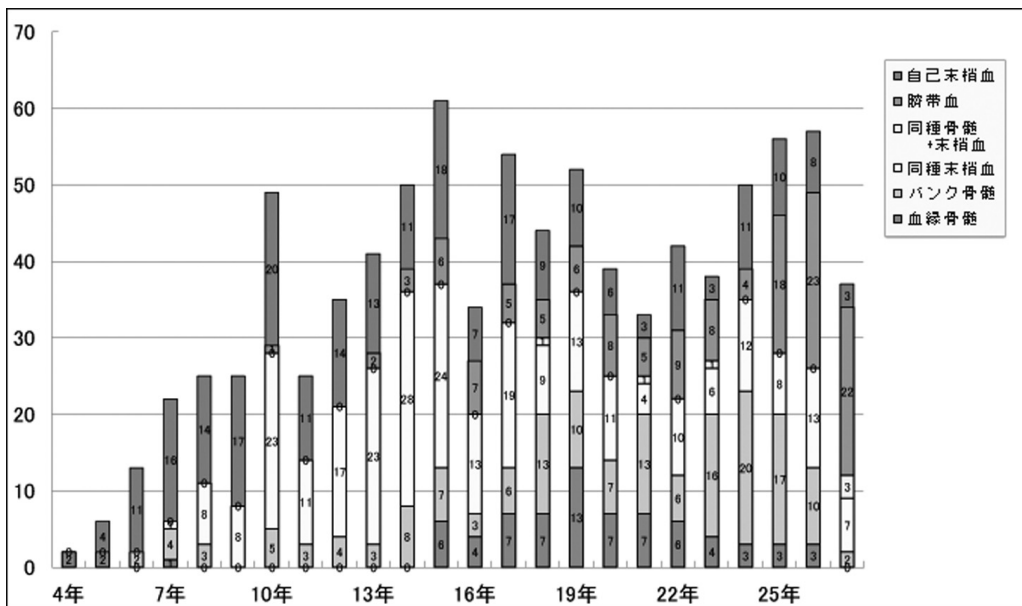
(前回) 1991年2月21日に県内初の同種骨髄移植を開始することができ、同年9月に完全無菌室1室が設置され、続いてクリーンベッド3台が購入されました。

ここで、骨髄移植を立ち上げる時に尽力いただいた医師について述べます。佐藤昌彦医師は、1983年4月に熊本大学第2内科より赴任し、紫藤先生の下、血液疾患診療の中心となり活躍していました。当時、病棟での仕事が増えるのではと骨髄移植の導入に反対していた病棟の看護師さんたちを説得して、導入の先鞭をつけてくれました。骨髄移植の導入については、当時の蟻田院長はじめ多くの方々のご支援をいただきましたが、看護師さんたちから敬愛されていた佐藤先生の説得なしには、導入は困難だったと思います。骨髄移植の導入に貢献していただいた大恩人の一人です。また、眞田功医師は、大学では染色体の研究をしていて、熊本大学第2内科では唯一の染色体の専門家でした。ATL患者の染色体異常の最初の英文論文を書きました。また、高月教授のもう一つのライフワークである高月病について、日本で初めて、100例を超える症例数を集めて英文にしました。高月先生がいつも引用される論文です。彼はこの症例を集めるため、症例報告があれば、その後必ず発表者を訪ねました。また、塚本敦子医師は、恵楓園の勤務医で、当院の血液内科の診療援助で、ほぼ常勤医と同じ数の患者さんを受持ち、血液内科に貢献しました。恵楓園勤務の日でも、患者さんの容体が悪いときは、早朝、当院に来て患者を診て恵楓園に行き、夕方はまた当院に戻り遅くまで診療

してくれました。現在も、診療援助の外来を続けてもらっています。1992年、熊本大学第2内科医局長だった清川哲志医師が当科に加わり血液内科は新時代を迎えました。同年、本邦初の骨髄液の海外搬送を行いました。(本院で骨髄液を採取し、ドイツ・ジュッセルドルフへ空輸して移植しました。) 1993年、藤井眞一郎研修医が九州大学第2内科に末梢血幹細胞移植を習いに行き、当院でも同年5月より自己末梢血幹細胞移植を開始しました。藤井医師のおかげで、当院で自己末梢血幹細胞移植ができるようになりました。藤井医師は、この後、大学で樹状細胞の臨床研究で博士号を取得し、この研究をライフワークとし、当院にも所属しました清水佳奈子医師とともに、米国にも留学し、研究を続け、現在は二人とも理化学研究所(横浜)の研究チームリーダーとして活躍しています。この年、河野文夫医師が臨床研究部長に昇任。研修医は、牛島健、芹川聖生、吉窪誠司が当科で研修してくれました。1994年、骨髄バンク(財)での、非血縁ドナーによる同種骨髄移植を開始しました。研修医は坂本浩子。1995年、同種末梢血幹細胞移植(PBSCT)を開始。研修医は佐藤英明、原田奈穂子、上野雄文、荒木幹生。1996年、固形癌(精巣腫瘍)への自己PBSCTの開始。年間の造血幹細胞移植数25例に達しました。レジデントは清水佳奈子、木村哲也。紫藤先生が退職され、悠紀会病院院長に転出されました。1997年、一座不一致同種PBSCTを開始。レジデント藤井眞一郎、研修医は上野雄文、荒木幹生。1998年、本邦初の成人の臍帯

血幹細胞移植を施行。レジデント藤井眞一郎、研修医は児玉章子。1999年、河野が日本PBSCT研究会を代表してフランス・ミュルーズで開かれた国際PBSCTシンポジウムでAMLの自己PBSCTによる治療成績を発表しました。この年くらいから、骨髄移植が文字通り軌道に乗り、同種PBSCTの症例数は全国一になりました。

(院長 河野文夫)



国際医療協力「JICA研修」安全な輸血確保による感染症予防

一昨年度に一旦は終了した「安全な輸血医療」（中米対象）が、全世界対象の英語コース「安全な輸血確保による感染症予防」として再開することになりました。今年度の参加国はアゼルバイジャン（1名）、ブルンジ（2名）、エジプト（3名）、ミャンマー（2名）、ニカラグア（1名）です（写真1）。

一行は2016年1月12日に来日し、JICA九州（北九州市）でのオリエンテーションや日本語研修を終えた後、18日の赤十字九州血液センターでの見学研修を皮切りに、熊本大学病院、熊本県血液センター、国立感染症研究所、東京都赤十字血液センター、東京大学病院、循環器病センター、長崎大学医学部・歯学部附属病院、当院（写真2）などで研修を続け、2月10日のアクションプラン発表会・閉講式を迎えました。やはり国の状況によって医療や輸血システムのレベルに違いがみられ、例



写真1：熊本医療センターヘリポートでの記念撮影



写真2：手術室のモニターシステムを見学



写真3：臨床検査科輸血部門で熱心に学ぶ研修員

えば、骨髄移植について知っているのはアゼルバイジャンとエジプトの2ヵ国だけでした（職種の違いも影響?）。骨髄移植が成功するために必要不可欠なのが安全で遅れの無い輸血供給システムですので、この移植を実施しているということは、レベルの高い輸血システムが構築されているということになります（写真3）。

研修員各自、自国での更なる活躍を期待しています。（臨床検査科長 武本重毅）

第5回 二の丸外傷セミナーが開催されました

2016年2月7日に第5回二の丸外傷セミナーが開催されました。二の丸外傷セミナーは初期研修医1年次と救急に関わる看護師を対象とした外傷初期診療シミュレーション教育で、外傷初期診療ガイドライン「JATEC」に準じた内容で当院独自で行っているものです。指導は、院内救急科医師、外科医師、整形外科医師、救命救急センター看護師だけでなく、さらに院外から松本克孝先生（熊本市市民病院外科）、木下浩一先生（人吉医療センター外科）、武藤和彦先生（人吉医療センター整形外科）、伊東山剛先生（熊本赤十字病院脳神経外科）、泉大輔先生（熊本南病院外科）に参加していただき、当院の研修医の指導を行っていただきました。また研修医2年次も後輩の指導のアシ



二の丸外傷セミナー会場の様子

タントとして参加いたしました。指導していただいた先生方には深く感謝しております。また、熊本市市民病院の医師・看護師、人吉医療センターの医師・看護師の方々も見学に来ていただきました。

受講生は1日をかけて、外傷初期診療について多くのことを学びました。きっと、医師・看護師として大きく成長できたのではないかと思います。当院救命救急センターには多くの外傷患者が搬送されます。患者様の救命のために、今回学んだことを生かしていってくださることを期待しております。

（教育研修科長 原田正公）



参加者全員で記念撮影

最近のトピックス

腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術

(Transabdominal Pre-Peritoneal repair : TAPP法)



外科医長

久保田 竜生

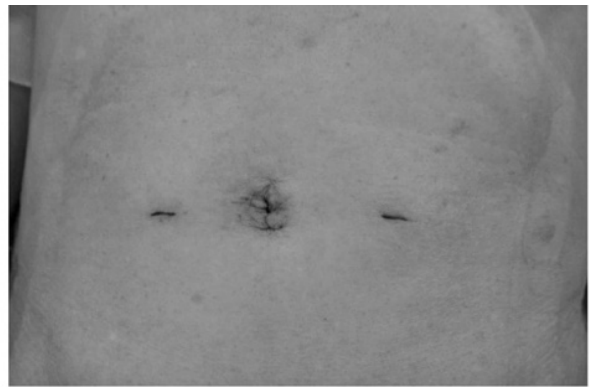
鼠径ヘルニア（脱腸）はお腹の中にある小腸などの一部が、足の付け根（鼠径部）の筋膜の間から皮膚の下に出てくる病気で、治療としては手術が唯一の方法です。全国では年間約16万件の鼠径ヘルニアに対する手術が行われており、外科の中でも最もポピュラーな手術のひとつと言えます。当院では年間60～100件程度の手術を行っています。この手術のツボとしては筋膜の脆弱によって生じたすきまを、いかに補強するか、ということに尽きます。従来は鼠径部切開法といわれる方法で、文字通り鼠径部からアプローチを行い、筋膜の補強にポリプロピレンを材質としたメッシュシートを埋め込みます。プラグと呼ばれるバドミントンの羽のようなメッシュを埋め込む方法も一般的です。一

方で、外科における腹腔鏡下手術は、その適応を広げています。2012年4月に腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術に対する保険点数がアップされ、腹腔鏡下ヘルニア手術が再び注目を集め、積極的に行われるようになってきました。当科でも2014年4月より腹腔鏡下手術（経腹的腹膜前修復法：TransAbdominal Pre-Peritonealrepairを略してTAPP法）を導入しております。この手術の従来法に対するメリットは、傷が小さく疼痛が少ないこと、整容性が良いことなどがありますが、我々が考える一番の導入理由は、腹腔内から観察することで、より直観的に病態の把握、治療が可能になるという点です。これは一回の手術で、外・内鼠径、大腿ヘルニアの修復が可能となり、適切な場所にメッシュを固定できる、すなわちより再発の少ない手術ができる可能性が高まることを示しています。もちろん、デメリットもあります。全身麻酔が必要になること、腸管損傷など重篤な合併症を起こす可能性があること、（従来法と比べ）時間がかかることなどがあります。また、これはデメリットではありませんが、この手術を行うにあたり、技術的に十分習熟する必要があります。鼠径部ヘルニア診療ガイドライン2015では、“成人鼠径ヘルニアに対して腹腔鏡下ヘルニア修復術は推奨できるか？”との問いに対し、“手技に十分習熟した外科医が実施する場合には、腹腔鏡下ヘルニア修復術は推奨できる。”としています。再発、合併症のない手術を目指し、日々精進を続けていきたいと思ひます。

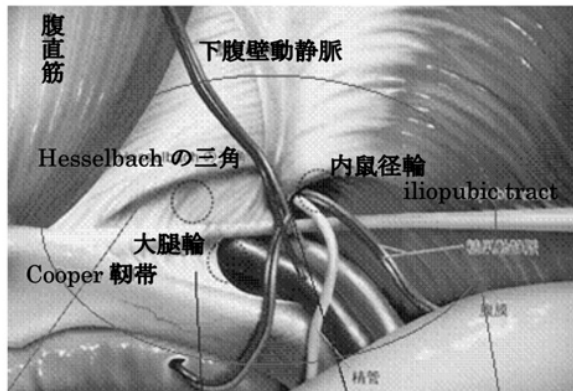
①術中写真



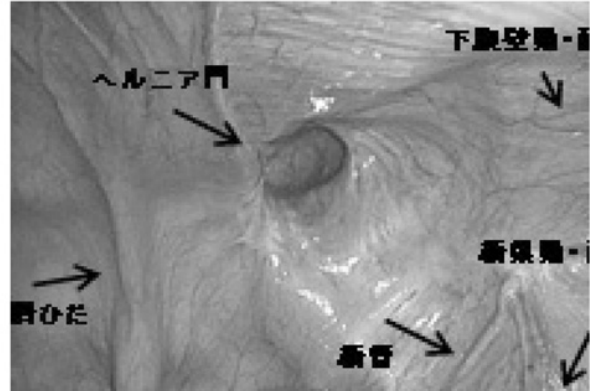
②術後のキズ



③鼠径部解剖のイラスト



④実際の写真



いま、国立病院機構
熊本医療センターで
何が研究されているか

シリーズ101回

自死遺族支援に対する活動の評価

救命救急センター看護師 池田 佳奈

熊本医療センターは、熊本県の救命救急センターで唯一の精神科病棟を有しており、自傷・自殺症例を多数受け入れています。平成26年度の救急患者受け入れ件数18,546件の内、自殺未遂自傷患者の受け入れ件数は550件、その中で自死に至ったケースは25件でした。自死により遺された遺族は突然の悲嘆に混乱し、二次的な精神障害や群発自殺を招くことがあります。多くの自殺未遂自傷患者の受け入れに対して、平成24年6月より精神科医師、救急外来看護師、臨床心理士をメンバーとして「自死遺族対応チーム」を院内に立ち上げ、平成25年度は電話による介入、平成26年4月からは手紙郵送による介入を開始しました。また、平成24年12月より行政や警察との連携を目的に、自死遺族ケアの多職種ワーキング・グループとして院外の活動を開始しています。活動開始1年を経過し、自死遺族支援に対する活動の評価を行うことを目的に現状調査を行いました。

【目的】

当院「自死遺族対応チーム」による自死遺族支援について、現状を把握し活動を評価する。

【方法】

1. 平成25年4月から平成26年12月の救急外来受診記録から、「自死遺族対応チーム」の介入件数を調査する。
2. 介入した症例に対する支援状況と内容から評価する。

【結果】

調査した期間に救急外来に搬送された自傷症例は、合計45件（平成25年度27件、平成26年18件）でした。その内、自死遺族対応チームが介入した症例は、合計32件（71%）、平成25年度18件（67%）、平成26年度14件（78%）でした。手紙郵送によるニーズの把握ができた件数は、平成25年度0件、平成26年度は11件でした。また、保健福祉サービスとの連携件数は、平成25年度0件、平成26年度は2件でした。（表1）

【考察】

平成25年度のチーム介入と比較すると、平成26年4月以降は増加していました。これは、平成26年4月より、電話での介入から手紙郵送への介入に変更したことが影響したと考えます。介入は、業務と平行して行うため、手紙が電話よりも介入しやすく、遺族にとっても文面として手元に残り、振り返る時間を作ることができたのではないかと考えます。また、平成26年度には、図1のように保健福祉サービスと連携ができた事例も増加しました。これは、「自死遺族ケアの多職種ワーキング・グループ」を通して、警察・行政との関係構築が影響していると考えます。

【今後の課題】

1. 自責の念や孤立しやすい傾向の強い自死遺族に対して地域ケアへ繋げる件数を増やし、地域・行政との連携を強化します。
2. スタッフが統一した家族対応が出来るようにシミュレーション等を実施し、自死遺族に対するケアの向上を目指して活動を継続していきます。

表1 自死遺族対応チーム活動状況

	自死件数	家族ケア	電話フォロー	手紙郵送	行政連携
平成25年	27件	18件	2件	0件	0件
平成26年	18件	14件	1件	11件	2件

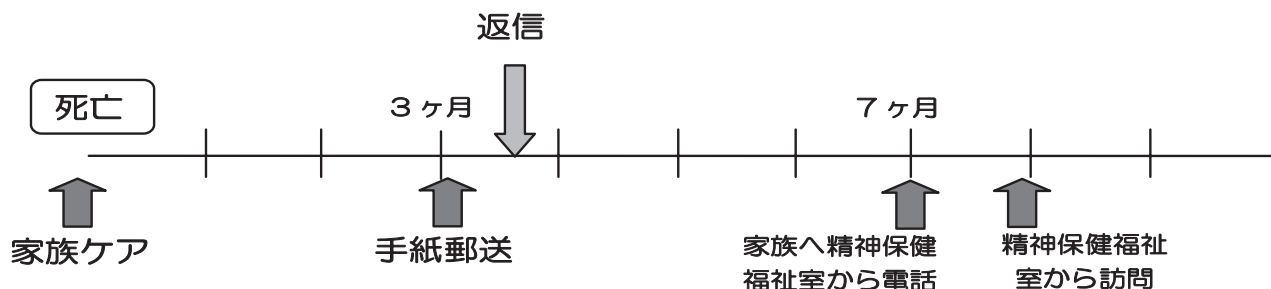


図1 行政と連携できた1症例の経過

熊本市第4回市民医療講演会が開催されました

去る1月30日(土)に熊本医師会館にて、くまもと医療都市ネットワーク懇話会と熊本市の主催で第4回市民医療講演会が開催されました。この講演会では、毎年テーマを決めて“熊本における最先端の生命科学研究と優れた医療技術”を市民にわかりやすく紹介しています。今年のテーマは「心疾患・脳血管障害の治療や研究」でした。熊本大学附属病院、国立病院機構熊本医療センター、熊本市市民病院、熊本赤十字病院、済生会熊本病院それぞれの施設から講演がありました。

当院からは、「無症候性微小脳出血microbleedsと脳卒中・死亡予測」と題して、“国立病院機構 EBM 推進のための大規模臨床研究”事業のデータ(MARS 研究、当院主導)を中心に私が講演致しました。熊本市は全国的にも医療水準の高い医療都市であり、今後、さらなる医療サービスネットワークの充実を望みます。

(教育研修部長・脳神経外科 大塚忠弘)



公用車を更新しました

公用車を更新しました。加藤神社で交通安全祈願も済ませ、これから地域医療連携などに活躍します。

皆様の所にご挨拶に伺います。よろしくお願いいたします。

(地域医療連携係係長 田中富美子)



研修医レポート

歯科研修医

ばく ちん する
朴 真実



はじめまして。歯科口腔外科研修医の朴真実です。生まれも育ちも北九州市小倉北区で、九州歯科大学を卒業後、今年度4月から当院歯科口腔外科にて研修させていただいております。熊本は初めての土地ではじめは不安もありましたが、今では熊本の暖かい風土にすっかり慣れてしまいました。

研修当初はわからないことばかりで右往左往しておりましたが、先生、スタッフ方のご指導のもと、少しずつわかることも増え毎日充実した研修生活を送っております。

歯科口腔外科では、一般歯科では経験できない症例を数多く経験させていただいております。炎症や外傷、腫瘍、嚢胞、親知らずの抜歯など口腔外科領域の疾患はもちろんですが、齲蝕・義歯・歯周病治療といった一般的な歯科治療も日々勉強させていただいております。

また、高血圧や糖尿病など全身疾患をもつ方の歯科治療、薬剤関連顎骨壊死の方の治療や周術期口腔機能管理などを経験させていただく中で、歯科医師として全身を考える必要性、また口の中の健康が一人一人の生活を支えているということを感じました。形成外科、皮膚科、耳鼻科には各科2週間ずつ研修させていただき、有意義で貴重な経験を通じ、多くのことを学ぶことができました。医長の中島先生をはじめ歯科口腔外科の先生方や衛生士、看護師の方々、お世話になった他科の先生方には本当に感謝しております。また、医科の研修医の先生方が身近にいることもとても良い刺激になっております。

学べば学ぶほどわからないことの多さに気づき、自分の未熟さを痛感しておりますが、残りわずかな研修期間、一日一日を大切に日々精進して参ります。これからもご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

研修医レポート

臨床研修医

おおつか ひろひと
大津家 裕仁



こんにちは。研修医1年目の大津家 裕仁です。熊本大学を卒業し、2015年4月から熊本医療センターにて研修させていただいております。研修開始から10か月が経ち、徐々に仕事に慣れてきましたが、まだまだ未熟であることを実感する日々であります。

4月の血液内科から始まり、麻酔科、腎臓内科、救急救命部、呼吸器内科とそれぞれの診療科にて2か月ずつ研修させていただきました。

最初の血液内科では医師としての仕事以前に、電子カルテの使い方や仕事の上での人との付き合い方などに慣れるのに精一杯で、指導の先生や看護師さんその他スタッフの方々に大変お世話になりました。医師だ

けではなく社会人の1年生として様々なことを学べた時期だと思っております。

次の麻酔科では日々様々な手術の麻酔管理を学びながら、静脈ルート確保、腰椎穿刺、動脈ライン確保、挿管といった様々な手技を実践し習得しました。このように実際に体で覚えた手技を、今後の医師生活に活かしていきたいと思っております。

8、9月は腎臓内科にて研修を行いました。朝の透析室での仕事から始まり、シャント手術、経皮的血管形成術(PTA)といった特徴的な処置の手伝いをし、患者さんの輸液管理を学ぶという非常に充実した日々を送ることができました。

その次は救命部での研修でした。病棟では患者さんの全身管理から転院の手配まで幅広く、救急外来では様々な疾患の初期診療及び治療について学びました。ここで学んだことは、他の科でも大いに役立っています。

そして現在呼吸器内科で研修しております。呼吸器は患者さんの生命に直接関わることも多く、時に自分の無力さを痛感することもあります。無事に退院される患者さんを見て元気をいただく日々を送っております。

まだまだ未熟な身ではありますが、今後も先生方、スタッフの方々に支えられながら研修を進めていく所存でございますので、皆様何卒よろしくお願い申し上げます。

臨床研修医

かないけ としお
金池 俊夫



皆様、こんにちは。研修医1年目の金池俊夫と申します。昨年3月に熊本大学を卒業し、4月から熊本医療センターで初期臨床研修をさせて頂いております。血液内科から研修を開始し、その後麻酔科、循環器内科、救急救命部、そして現在は神経内科で研修をさせて頂いております。

研修生活を開始して約9か月経過し、何かと新しい環境に順応するのに時間のかかる自分ですが、ようやく研修医としての日常生活や、熊本医療センターという病院自体にも慣れて参りました。最近、医師として患者さんに向き合うことの難しさ、責任の重さを痛感する毎日で、自らの無力さに打ちひしがれながらも一日一日精一杯精進しております。

最初に研修させて頂いた血液内科では、医師として働くことや、熊本医療センターという病院自体について何もわからず、不安で一杯の自分に対して一から懇切丁寧にご指導頂きました。また血液内科では白血病でお亡くなりになる方も数多く経験し、末期の患者さんやご家族に対して接する中で、自分の無力さや生命というものについて考えさせられることも多く精神的に苦悩する毎日でした。

次の麻酔科では、静脈ルート確保や気管挿管など基

本的手技を始め、全身管理について基本的なことからご指導頂きました。手術中の患者さんの刻々と変化するバイタルサイン、全身状態に常に目を光らせながら、瞬時に適切な対応を要求される麻酔科業務の難しさ、責任の重大さを痛感しつつ、そのようなご多忙の中にもかかわらず日々丁寧にご指導頂きました。

その次は救命救急部における研修でした。外来においては、救急患者さんの主訴、現病歴、バイタルサイン、身体所見から適切な検査をオーダーし、検査結果を含めて問題点を挙げ、その後の治療方針を立てるという一連の流れを、迅速かつ適切に行うことが求められます。病棟では、不安定な全身状態の重症患者さんを担当し、自分なりに病態を把握し治療計画を立てるものの奏功しないことが多く、医療の難しさを改めて痛感する日々でした。

現在回らせて頂いている神経内科では、主に脳梗塞急性期の患者さんに対して、身体所見や検査所見から責任病巣を特定し、適切な治療法を計画し、日々バイタルサイン、全身状態をモニタリングし適切な治療を行っていくという過程について丁寧にご指導して頂いております。

もうすぐ研修生活も1年が経とうとしておりますが、自分としては少しも成長している実感が感じられません。ただ一つ言えることは、自分は先生方を始めメディカルの方、事務の方を含め非常に多くの人に支えられているお陰で、何とか日々の業務を行わせて頂けているということです。本当に皆様には心より深く感謝しております。まだ今後も皆様にはご迷惑をお掛けすることが多々あるかとは思いますが、一生懸命頑張っておりますので何卒よろしくお願い申し上げます。

研修のご案内

第145回 救急症例検討会

日時▶平成28年3月9日(水)18:30~20:00

場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

テーマ「内因性救急疾患」

国立病院機構熊本医療センター腎臓内科部長

富田正郎

国立病院機構熊本医療センター血液内科部長

日高道弘

国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長

西川武志

医師、薬剤師、看護師、放射線技師、臨床検査技師、栄養士、救急隊員、事務部門等全職種が参加できます。多数のご参加を歓迎します。

【問合せ先】国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局 TEL 096-353-6501 (代表) 内線2630 096-353-3515 (直通)

第206回 月曜会(無料)

(内科症例検討会)

[日本医師会生涯教育講座1.5単位認定]

日時▶平成28年3月14日(月)19:00~20:30

場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

1. 内科基礎講座 診療で遭遇した興味ある症例の検討を行います。

「第1症例 遷延性低血糖による意識障害」

国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科

大津可絵

「第2症例 呼吸器内科の症例から」

国立病院機構熊本医療センター呼吸器内科医長

名村 亮

2. ミニレクチャー「移植治療の進歩 GVHD治療」

国立病院機構熊本医療センター血液内科

渡辺美穂

日頃、疑問の症例、興味のある症例、X線、心電図、その他がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

【問合せ先】国立病院機構熊本医療センター統括診療部長 清川 哲志 TEL:096-353-6501(代表) FAX:096-325-2519

第174回 三木会(無料)

(糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会)

[日本医師会生涯教育講座1.5単位認定]

[日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定]

日時▶平成28年3月17日(木)19:00~20:45

場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室2

1. 「当院における2型糖尿病教育入院患者の特性と食事療法支援の課題」

国立病院機構熊本医療センター栄養管理室

池田かおり

2. 「こんなDPP-4阻害薬の使い方はどうでしょう～実臨床から考えるDPP-4阻害薬による糖尿病治療の変革点～」

熊本大学大学院生命科学研究部 糖尿病分子病態解析学

下田誠也先生

なお、興味のある症例、疑問・質問のある症例がございましたら、お持ちいただきますようお願い致します。

【問合せ先】国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長 西川 武志 TEL 096-353-6501 (代表) 内線5441

第60回 症状・疾患別シリーズ(会員制)

[日本医師会生涯教育講座2.5単位認定]

日時▶平成28年3月19日(土)15:00~17:30

場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

座長：開病院 副院長

大柿 悟 先生

演題：「プライマリケアで行う糖尿病合併症の内科的管理」

1. 急性合併症の管理

菊池郡市医師会立病院 副院長

豊永哲至 先生

2. 細小血管合併症の管理

国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科医長

小野恵子

3. 大血管合併症の管理

国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長

西川武志

この講座は有料で、年間10回を1シリーズ(年会費10,000円)として会費制で運営しています。但し、1回だけの参加を希望される場合は1回会費2,000円で参加いただけます。

【問合せ先】国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局

TEL 096-353-6501 (代表) 内線2630 096-353-3515 (直通) FAX 096-352-5025 (直通)

2016年 研修日程表 3月

国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

3月	研修センターホール	研 修 室
1日(火)		
2日(水)	18:00~19:30 第97回 国立病院機構熊本医療センター クリティカルバス研究会(公開)	
3日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「院内暴力と対処法」 国立病院機構熊本医療センター院内警備統括担当者 西村一弥	
4日(金)		
5日(土)		
6日(日)		
7日(月)		
8日(火)		
9日(水)	18:30~20:00 第145回 救急症例検討会 「内因性救急疾患」	
10日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「病理から臨床へのフィードバック」 国立病院機構熊本医療センター病理診断科部長 村山寿彦 18:30~20:00 熊本県臨床細胞学会 ＜細胞診月例会・症例検討会＞	
11日(金)		
12日(土)	14:00~16:00 第268回 熊本県滅菌消毒法講座 「中央材料室における感染対策」	
13日(日)		
14日(月)	19:00~20:30 第206回 月曜会(内科症例検討会) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定]	
15日(火)		
16日(水)	14:00~15:00 第36回 市民公開講座 「近視・遠視・老眼について」 国立病院機構熊本医療センター眼科部長 近藤晶子	13:00~17:00 糖尿病教室(研2)
17日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「防災の心構え」 国立病院機構熊本医療センター救急医療支援担当者 後藤達広	19:00~20:45 第174回 三木会(研2) (糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定] [日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定]
18日(金)		15:30~16:45 肝臓病教室(研2) 「自己免疫性肝疾患について」
19日(土)	15:00~17:30 第60回 症状・疾患別シリーズ 「プライマリケアで行う糖尿病合併症の内科的管理」 [日本医師会生涯教育講座2.5単位認定] 座長 開病院 副院長 大柿 悟 先生 1. 急性合併症の管理 菊池郡市医師会立病院 副院長 豊永哲至 先生 2. 細小血管合併症の管理 国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科医長 小野恵子 3. 大血管合併症の管理 国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長 西川武志	
20日(日)		
21日(月)		
22日(火)		19:00~21:00 小児科火曜会(研1)
23日(水)		
24日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「産婦人科領域の腹部腫瘍」 国立病院機構熊本医療センター産婦人科部長 西村 弘	
25日(金)		
26日(土)		
27日(日)		
28日(月)		
29日(火)		
30日(水)		
31日(木)		

研1~3 2階研修室1~3

※二の丸モーニングセミナーにつきまして、詳細はホームページ(<http://www.nho-kumamoto.jp/>)をご参照ください。

問い合わせ先 〒860-0008 熊本市中央区二の丸1番5号 国立病院機構熊本医療センター2階 地域医療研修センター TEL 096-353-6501(代) 内線2630 096-353-3515(直通)